出羽秋田に始の手つゝ
植ける萬葉一株九十
年星霜を経て枝葉ハ家ニ盛ニ
花あり咲事ハ七重ならぬ
つらね
少此まで二さ絶
し
忍しまかすま

一 此人[illegible]ひ難す

呼ふは[illegible]皇帝の詔乃

世におしく世りたりとまさる

んてり紙おしみ古記あり

あるも用老の口津ゝ紙箱

日当て手紙を亡者品題を

和かうち大王北国の去とす

然り一色の白きあつ也

皇者武儀いはゝ也世尸北

隠は後遁ろおほそ之姫

国とも子を向ふ給くもひさき

一 せうかひく[illegible]川 思河北也

一 堂上にも不出[illegible]に此序撰者
多年の積悔くりかへし
末ひろけく古今の序を
掌を拝さしあつ小鍋
きよくなれ月雪風情
を刷へハ古此楽哉つ申里

ちか頃菩薩の面を掌
かくしうる矢皆なき白
称李の様なる歎きの
うたは小町か作まては
宇称なる大あり此字ハ
是なり[illegible]して是極

たまけ出放し千
古乃一人長く芳情を序
ほし此ひめ又千載乃
浮千万に上年秋ゑ云

出羽のかたかたるゝ小野といへる所ある里人の口すさびしは
里のそこらくは小町の生涯あまたさまさまいさや流浴の古歌
しも数々の人に正郡の光とて世まれにまれしは翁と言
く之とかたちをせあききこゆされは名のおかるを
かたくへは多きせよちのきまて明証なく都ちかき
うち山の清水流るゝ泉にきくは都あるみえと
ゆかしめ山路の名を語り出むもやさしかりめと
里人の語り伝へありきたちやさしけんは寛あるましくや

羽秋田

柳麻翁

賢者は一失愚者の一得有徳のよし
古へを伝へられ其の品を覚えさせ給の
なかし　昔の事や寧よ古稀の哉し
雄勝乃郡小野の篁ハ小町の旧跡にて
其の人に拠り　苅萱の里桜葉和も
磨しく我もとの盛りの夜なるを
花は四時の歴されとも名は行つり
稀の古み奈く　　云も前人世琴

さらし紙さ　此ちりまさる
物ハ文よ紙を記紙りとめ比を
見所さくの之海とさま二ツの花の名れ
むかしく代とよ香ひの孫とさ
残人筆紙形子のみ

干時
享保十九寅年
卯花月上院
杏風堂
如吟
述

羽州雄勝郡小野の里舊跡の記

蓬氏芍薬九十九本

小町ミつから実植しく九十九本のうち紙孫し花を法実卿の花といふ

小町の歌に

実植しく九十(ツクモ)九(ツクホ)本のこのかえしこふ
法実寺のまへかしをくや
以下略

遠境廿八ヶ宿

松よりひやちとろれ海の堤みらて
袖の　小野の以下略

読人不知

岩屋

まつ虫の身やちらしく根ニ入いけ岩の
窟のうち毎に松としらぬ

小町老女となりし所ニ住せ

二ツ塚

小町存生の時深草少将の塚を築せ并
香塚をも築おく骨収埋へしと云置しく

桐田小町の塚
別書林少将の塚

此岩屋大きに小町勤して小町亮居んて
旭日同し雖然く身形ふ影のあとしある時は
崎の御堂此薬師をおとし千種の花を毛し

又河内にハ於仏の観音ニむかひく無量像
を形いし前と申す塚とある

良實御城跡

七辻
四十馬行

此地ハ桐田ト云

ら実御ハ人皇三十三代
敏達天皇之末葉也

野中山小野寺

小町の寺と

本尊千手観音定長作於此寺
恵覚小町の古書収集く百とせの
像を作 お今ニ有

都より　かけねありく

なきあとやおもひしれぬる月

小野の人これをしあはれみ

叡山円教院関梨廻国の時観音の像を定長

に作らせ当国此院此所七ヶ所に立給ふ

その詠に

秋もすみし月小野の里の花

うつろふの露にぬれやとこその袖

播州之住人分部左京亮政寿　寛永十二年

浮野国之略

おそれ薬の事にのりくいまへの

詠ありし小野く婦る里

秋田侍所之尽執上曹八万集治俊為鑑

に出く

いまし一の詠の何く意秘同く

かとのふ　花の詠人なき

桑原薬師堂

大同二年良実口建立

此寺ハ一ヶ将の持仏薬師

小野ゝ本佛釈音ぢ納めまゝ

小町辞世

いつとなく返さるやらんかけろの身の
いつれ色もかわりゆくなれ

小町ハ平城天皇之御代大同四年ニ出生
昌泰三年ニ卒ス行年九十二歳ト云ヽ
于時享保十九年迄九百廿六年也

小野比当系

花ハ一重まて
大輪なり
色白くきみさしうすむらさき

松か枝は五尺まて長き迄て其数
九十九年今に増減なし也
いつれかつゝめおよふ枝を
手折てかゝしと雨降る
斎也

一とせ其雫士紫翠と此まうれし此省菜の
もとふかく其の理を尋られしに里人あかりし此
よし伝かゝるいさゝと一枝を手折てもて来るに
さらさら降ちり此枝ゆつと謁せ有けく
菊すゝしく香のやうに
つらなり無しといふ衣遁姫の
あはれなるや

秋田誹泉堂

此枝折のあゆみ無しや村時雨　其雫

百姓なまり晴にも雨色
春風まし葉出すれは

止子

穂ハ野にすゝやおもたか　笠に蓑

紫紅

菅蓑

あらしなくれは雨を凌き
菅原の生しき半分

菅蓑や花ももみちの眠り哉　秋田漆　東之

雲織の一重や塚のあひすゝ草　仝　岸鴝

菅蓑に迹もたえし出羽の雲　仝　羊歩

菅蓑や駒ハあれとも今ハ蓑　仝　暁聲

雲の色移りかはれ白き草　仝　生棗

笠を拭菅蓑のかはりの郷　仝　尓玉

民やも雲の通ひのかほんくさ　仝　竹旦

地の徳も小野の跡の白除容　仝　一椅
時津風玉為菜や小町の昼　仝　千色
為菜の唄ハ美人の岩戸かな　仝　如碓
拾ひや一夜始ましかほんさき　仝　草也
為菜の主も恋すしやはくも髪　仝　可宴
為菜の割子もたしぬ一夜哉　仝　角奴
綾子きれ子盛ハ為菜の水や星　仝　千苓
為菜や呉しぬ夜も説玉の佩　仝　千之
為菜や窕月子ハなし小町の原　仝　五木

為菜や雨千るゝき峯の雲　仝　西仙
しらくやくの花ハ代毎の玉手箱　仝　一騰
書見のぬ星の為菜百日め　仝　汶水
二枕見ぬ世ハ星気子為菜　仝　活石
為菜の香や涼き一夜川　仝　桂山
思てらくやおとりよくれの旅硯　仝　有流
九十九相や博き寝ぬ夜の息よ含さ　仝　洞口
為菜ハ見ぬ世の月の雫の稲　仝　八香
為菜平小町の縺を解お前　仝　落家

犀角ハ水を洗し如吟子ハ鄙言を
清きと星光の洞子洗てさらになり
それハ言ふ句なきしつる而已

秋田城下 虫二亭

苗菜やうこかぬ星の玉造り　同僧 紅塵

苗菜や水すも袖を小野の雨　同僧 宇紅

苗菜や花なく五尾袖の露　同僧 芳林

苗菜銀杏むしれ歌よりも　同 北湖

苗菜や見も千將の力瘤　同 知守

梦れ香や九千九苗菜今更子　同 海鶴

冠の下ゆも日なりかほんかさ　同 中粮

かほんかさ鄙のいえも都の郷　仝 千奴

傘ハ何品おし洒の花の桐　仝 花実

苗菜も留貴平小町ら要る　仝 雨水

苗菜れ英子割あり恐ひ笠　仝 可隙

しやうろや甚招を同え九千九髪　仝 桂実

苗菜の雲の振ひ折紙野　仝 丁圭

いろいろ小降や小町田のかほんかさ　仝 莵足

花あし杉ふ小町もえ花の官女花　仝 鳳尾

およい里や苗菜ちふき小町の音　仝 流水

苗菜も啓けしき僧二人　仝　紅山

遠山やしらく花の小宰相　仝　紫辺

苗菜の来いつく胡蝶　仝　文里

しやく風くの雫橋あり小池田畫　仝　一契

薄雲ゝ紙半れゑやかほくさ　仝　仝

苗菜の肉を紀の湯の郎　仝　渕面

苗菜一垰ト師匠小野の里　仝　子仙

苗菜やかけらく小形く一主苑　仝　亀玉

師を訪ふ日と苗菜や和歌の浦　仝　硯蝶

いまさみかぬ小形や葉苗菜　仙角舘　荷笆

しやく風くの葱す新るや奥二郎　仝　風蛍

苗菜やなとさ芳す作らぬ人の傍　仝　後犁

苗す万代小形く雛の百千鳥　仝　仝

苗葉や唄の戸ほとは百の媚　仝　浮水

しやく風くの女たまとや東て下里　仙古　可急

しやく風くの香紙吹上よ雲の人　仝　志計

仮寝の觉め福貴や去ひまさ　仝今沢　仙中

しやく風くの人や浮世の身の外　仝　是友

青葉の床はかをるぬ小斗哉　仝 非文ち 加流

花は雲葉は鄙にかほん草　阿仁銀山 梅邦

青葉に紫の香れすむりの花　仝 仝

しやくの古儀に濟の薫哉　仙北角間川 孤松

青葉やさりとては文字の雨　仝 如草

しやくやや他の園まで筆の力　同横手 松葉

しやくやや天の賜園の玉　仝 如風

公けも指折てそろひす艸　仝 可吟

慈あるある虚言も那し青葉　仝 椎竜

青葉や児一口も鯢く盃　仝 岸竹

しやくやくの無すへの雨夜哉　横手 紅友

青葉や九十九年に花の千　同 松葉

しやく盃す白雲黒きおちる哉　秋田 高柳

青葉やおしく蓬來の袖しくれ　増田 可吟

世平嘆ム玉のきゆしや青葉　同 一行

青葉の音かゝる畔の玉　同 和塵

青葉の夏えも雨のいさ哉　同 千扇

涼草の招ひ稚なり青葉　縫殿家 ちよ

芍薬や絵師ゟ心のおもさ
艸子多紙掛すや小野の郡公
芍薬の風俗や雲井の玉かつら
しやくやくの袖よりかをる昔の香
芍薬や残る十二のひとへもの
芍薬やつ綻く草子半ともし
芍薬のあてめくや四の風
芍薬や度々忘るゝ疼のあと
しやくやくハ手垢のつかぬ盛り哉

横手 一昌
同 露貫
雄勝郡横堀 一閑
同 きよ
同湯沢 自官
仝 夏夕
仝
仝 治好
仝 如扇

芍薬し紅袖の不縁や夷かな
小野のも鏡へ向ケて色をのみ
牛乗の紅や芍薬 紅顔
しやくやくの苔や公家の雅言
人去をしら次芍薬咲けり
芍薬や浅葉紙筋小野の里
芍薬の白露ハかゆし小村家
しやくやく境泊子の百藁
脱蚕の一声伊達く息ひ寄艸

仝 風眠
仝 室賢
同能硎 林志
仝 三蝶
平鹿郡 湯井
増田 素琴
仝 佐流
仝 琴志

しやくやくの葉袖乗哉　男風
仝　如鳳

若菜の衣紋は雲のしみかな
仝　寛之

しやくやくや彼かれは何者と
雄勝郡岩崎　一峯

若菜の正風辞は素白ニ郡
平鹿郡増田　如伯

言んとせは痛口半んとするに翁淵くまなの芳囲まえのしるへにはと師子奥いりまかれし集の撰呂雲風乃咲すたとしせさとに奥しきも文むかし

若葉千塔ふかしく文の眉
若菜は実生の名かなて
仝　南枝

しやくやくの若き解法の乳房かな
若菜の風俗を手習ふ娘かな
仝　如吟
しやくやくや音績水の汗女浪
小野　覚亢
呼ふ人両毛の本銘ようくく
帳のきこえ雨の賦を翁良かさ
秋田　嵐足
玉形鈹　竹游

萵跡の部　塚跡

三ツ物

若草の身程龍まし　塚の跡
増田　素琴

初湯絹毎馬下りれ里
仝　如吟

手ハ雲手揚涼しと蛙見ゆ
仝　南枝

城跡の笑ひ哉しハ仄く〻ぬ
神宮寺　和仙

夏川と本風も甚らん城の跡
湯沢　治好

歌舞の地の花ぞ流まく菜畑
仝　如松

古城や千草れ扇子鮫のはら
横手　不可

雲紙押鶴かすり城の跡
増田　甫好

城跡とや三人リ子独く十三夜
仝　千扇

むかしハ郡司としく西を守りしに
城跡のさやしくて
桑木沿の盛なり桐田の吉河し
漆　東二

桐の名や家も多集川城の跡
増田　如吟

八十島

湖水なをあらしまや今ハ田甲子
真若のゆうしきり哉

漕出る花船や民の業津島
漆　東二

八十島の月や声継ほとしおれ
仝　一橋

早しゆや鴻も少まえ消花の波
湯沢　如扇

いな嵩の塩湯ハいふ音れしみ　湯沢 可邑

鳴呼風と乗もよかる嵩落　仙北浅舞 竹桑

いな嵩や雪か曙　雨のくれ　同岩崎 柳枝

春乃くと月いな嵩の星綫ゝ高　秋田 高柳

笠ぬ帆やいな湯かゝく夕涼　横手 迂泉

いな嵩や根（モト）ハ皂莢（サイカチ）萬れむ　増田 南枝

此所の無名かと見ゆる

いな嵩や鶏の冠と茗れむ　仝 如吟

花ハ雲井いな嵩の月艶高　仝 南好

小野寺

あるゝくときこえしも
さくらうはえ

寺ハ小野ゆく吹そや花落　湊 東ニ

小町や萬ハ則月東の桑　増田 如吟

涼殿を干や小町の夢れむ　仝 南枝

本奥より如く小町の衣鶏哉　湯沢 治好

いとし書いな雲小町のしくれ哉　醍醐 三蝶

読の音も埋む小町や東の雪　湯沢 如扇

栗梅や寺ハ花見杉よ小町の月　増田 南好

秋風の淋しさをしれある小野哉　横手　溥泉

藥師堂

千とせのかたちかな瑠璃の玉水
何ゝふ心すきよれ哉

新たなる涼しき玉の花高臺　湊　東々

無事段波想ひの的や藍の色　仝　洞口

萬ゝは瑠璃の光その青田哉　湯沢　治好

ありかたの何よりたうとや薬師草　増田　如吟

百草の味まて尊き桜如の花　横手　露六

岩屋

寂然としてあるを尋しくよれまふす
まよやと

洞暗く主人を喚は雲の峯　湊　東々

空蝉や秋ある苔の雲を吐　仝　洞口

玉を吐岩屋青みし六ッ花　増田　如吟

真人を拝や岩屋の夜の月　横手　不器

日は西へ木賊を渉る岩屋哉　増田　南枝

封しめを翁や岩屋の苔の花　同　甫好

二ツ森

鶺鴒やむかしを拍子森の陰　横手 如冷

咲かゝるよ竟妙川花の森　同 不孤

今もむかし守川の森の郭公　同 孝甫

夕立に花みを振せて二ツ森　同 飛雪

あとさきに二ツ螢や森乃媚　増田 甫好

きゝわきや森と森とのきりぎりす　同 南枝

うつり寝しく月も更く二ツ森　横手 秀紫

水口螢

水口も来て心中の螢かな　横手 如蘭

出羽の国小町といへる里ノ中の又宵
むかし人のあとをしたひす草
ありくらぶ

見ぬ人のゆかしれ花の縁もかな
わすれぬつくさや小野の古巾　横手 秀湖

長袖の西まてなき見てあらひす草　同 秀塘

口垢を神く洗ふやあらひす草　同 秀紫

しやくかくやかくまれ子を引女旅　同 孑箏

松風堂の如しかせむちしの花の
色をとらへて部の句を集むれ
しも俳泉の句にまさりて孫ならひ
俳友を手引して甚雫をくみ世に
かゞやかの色をあらはして以て今の代に
しらのみ

我宿は娘の名にも咲にけり　秋田俳泉 甚雫

月にも汗のうく伊呂波歌　横手 秀塘

夕立し清の姿に山の来て　同 如角

かよひ帳にと印判を集　同 甘古

風さやみ簾をかけて醒やけれ　同 秀甫

話好き絶てあるしの素麺　不孤

しほらき煙管も今ハ薬子号　秀塘

虚れなきハ挿揉蝉髻左右れ　如角

詩歌は作まくかくまて所之　甘古

白菜は琴の揺漾き、秘　秀甫

花とる〳〵の谷中は月の大笑　不孤

勇れ舞寡子はつくる縫　秀塘

皂莢(サイカチ)の鑰(カギ)令かくし吹て来る　如角

象潟よりれ出合菅(クヽ)種　甘台

能因かぬけし紙子寄る邊の首　孝甫
きのふの白歯どこの化物　不孤
神の色のえきあまる花の窓　秀塘
三度巻るハ雛子なりけん　如角
御面は冨士の杖つく春秋誉　甘古
對の帆蓆とふおく經尺　孝甫
面つきてしれぬハ人の法華寺　不孤
智恵ありし松の篩音　秀塘
縫迹も虫くひ無の康子との　如角

男しやと見てなまる新法師　甘古
春雨の霽れて踏箱根山　孝甫
憂殿ハ挽捧く挨拶　不孤
古池の心ミ紫しふりひしやく　秀塘
待まよめ縫く筆て露　如角
借人の羽織ぬきしや蕎月來　甘古
薪まし言ふ文方の笛　孝甫
をつくるハ中まも康の杉譲　不孤
滝の因もよ秋さりは前栽　秀塘

仮屋の日はなつきのこほり揃　如角

鬼門出れてなかる鳥声　甘古

顔をあらふ手水を羽衣ともなる　考甫

几巾の引尾の寺をんに落ける　不孤

甲寅読初の郎與

春衣解衣の香醇し朝日影　仙北増田 南枝

門万象のすゑなることろ　〃 甫好

風待ちか柳の雨の父母なれや　〃 如吟

石上に僕吟し考り新　南枝

月日駒よそく宿所乱ひやし　甫好

翠年よりするおのたまさら　如吟

起卧の目ほころみあり金剛尊　南枝

帆おきそへく袖ちかき波　仝

冬れ雪を稲ちり跡あせし強の志　甫好

へんほんと秘事たる教すり　仝

俳諧の出入世内入世好しき　如吟

身をも筆花車と若葉旧跡　仝

二ツまは合ゝ進めり杜の秋　南枝
月を荷ふ行まゝの岩高　仝
燃出る秋を行手ふうり世の皺　甫好
貴めくさより拘く来る竜施　仝
干天葉ノ鶏冠を菴の花と吟ち　如吟
佛法裸門か代千話　仝
序一枚讀く何らしてひ吟　南枝
学ある人辛く降雪　仝
帰かいふ来ゝある川町ハ等辰ぬ　甫好

牡丹平蝶のいとぬ羅　仝
山て帰捨し神音とゝ反紙衣　如吟
いあふとの事まて鉄炮　仝
仕通さぬ神精進まで雲震ふ　南枝
竿取子手のとゝきれぬ旅　仝
飛あって家り民や月高し　甫好
酒のゝのふつく薄味噌ふ秘　仝
降物子乾のぬ袖袂くるへあひ　如吟
いく春の垢や富士の新言　仝

海原の畦となめる琴の音　南枝
文字のちらく窓の押板　甫好
からじく（辛胥）壺摩居る母燕　如吟
春風そろ〳〵毛毯を讀　南枝
春とまる物は矢れ淡の花　甫好
三吟れ細むらよ　麗　如吟

哥仙

古楽や瑠璃の里鬢の文　秋田 千奴
書てもすめる豆の植代。　増田 如吟
茶の車か座の力紙旨ゆき　秋田 知守
都の花は四時を兼より　〃 丁谷
善所草毬と見ると自所　〃 子塵
玉とま置なみ久年の留　〃 流水
水先の鋤の工まよ夢絵詰　〃 文桑
あつくん半安るよし由　〃 栄圭

縄簾ちらと裂たる垣峯　丁谷
　龍の髭子もむかしに化す音　千奴
川の夜の尻を捨ふと帰る一ノ　流水
　かしむ子ちよろり借て見る音　和塵
遠く指人いやらしき　春れむ　栄圭
　刷毛のたかりけ尽ぬ口上　知守
またり主瑠璃離ハ寓す詞し文　千奴
　襟らく酔る玉明の音　文葉
得しと耳を敏川枇杷の毛　和塵

　當の通辞も五山でさへ濃　丁谷
子蛇觧目鳴らかハたがき　知守
　似や龍子あるハ時宗の扇　流水
東ても誰か歴代筆千　文葉
　焚きこしかり新云程り　栄圭
人形のところも意地汽車　丁谷
　一二よ在しく松平掛石　千奴
七九寸意いた上の三里作られ　流水
　鼻や洞やなのあへて後　和塵

庭掃て房もこほるゝ宵の月　栄圭
　別れ路の瀬をしらぬ胡鳥　知守
須磨の明石くらしの二子栗　千奴
程く程の時は化里駒　文葉
車見ぬ斎子伏枯の貴世貝　和麿
そよいひ車虎乃啼く　流水
蒸菴の浦事は錦るの天馬塁　知守
かゝるより欲の毒了　栄圭
傘子流板とさの錦の毛衣　丁谷

皆花かゝる菊園の棟　文葉

哥仙

しやれ風や余所ハ小倉の百福寿　秋田　丁谷
星の氣束を卯月田子鳴　増田　如吟
貴人より東子人をみにほろん　蟠田　荒足
遊いまぬ男代一句を婦ありわり　文里
嘉様娘の牛子棹さし昼の月　鳳尾
北をしろ子め庵提引　洌而

萩萩のかも浮原　葉莚　海鶴
墨絵乃んき　八声一息　竹游
携るとも塵あし　生ヶ鎌墨　丁主
渉りとり家や　樹陰ヵ　条因　丁谷
尻くいと久菜子　渡りの草履敵　文里
青縁の隙を鏡ハさあ雲　風尾
掻てハ笠髪の出る冬月　竹游
唖の貧人と物かぬ　君　海鶴
九嵜の澄ましと寺　条里　渕而

手とらぬ　放き　雲へ子全　丁主
あの枝ハ乞下書請の　む雲　和塵
常もる　揺ハよく　菟足
蒼浪の垢をあ川免て白魚子　風尾
何ろハ色吹か　揺く　業亭　文里
先あらく仕あせ嗜裂風ら海　丁谷
堅く　紐かふりや　蝉　竹游
吸物ハ女波男波の　柏子方　渕而
石も　鶏跡ハ押しりきぬ摺　文里

色なき山はをかしく笑之神　文里
白魚の鑑子常住盡け　海鶴
待甲斐もありて木情の囀虫　丁圭
男の方ハ暖き人肌　和應
湊橋につき出し言云の色　莵尺
鶴の尖も伏見出す霧　鳳尾
駒の脇もほつる手はなかつる　竹游
酒屋こえれて尾も穀も　丁谷
有馬山家の出来の無の飴　丁圭
誰か訊しやと養方中刺　莵尺
押照つ注文の撤乃花の幣　海鶴
鳥井おかりこそ春の曙　執筆

いさかり寝人とあらし五月寺
松風堂のしや風くの句ありかへ
ありかへ文

僧正の寝覚ハ同じ牡丹哉　秋田湊　風仙
翔ほとかほ香の試　仝　東之
越まても水よく滝津出て　仝　落家

肩まくりはづれはゆへ入り　風仙
目の外の窓へ呂斤に成る里　東こ
珠干案し梨子の新へ　落家
おきな子育物あり乳兄弟　風仙
烏帽子をきせしもしらぬ座達　東こ
此恋は業平橋の渉りまで　落家
八陣しかけ虚実はあり　風仙
廣斗つめる寮の粉流行書　東こ
踏かためし横て居さる　落家

月に数のみへぬ様な落書絵　風仙
絹え閣上雨のふる掃　東こ
如露をは水のかつくと菊に　落家
玉に栓をぬられ病王　風仙
蕎明子光の二木の前分根　東こ
蚕子盈家　徳のかくる　落家
高瓶の常の切られ　凡中　風仙
花ひつくりかへる英男之　東こ
女臣の座をもちくつ将ひ合　落家

瓶に石すこし平産　風仙
煤をあくる朝より蛎の出雲山　東こ
出ぬも知れぬ後生　落家
月の櫛あらへかしの糸柳　風仙
何とし鞠は蹴の腹下　東こ
蚕月にも織物には玉津しま　落家
猫子の葉を残す襟離(サラシ)日　風仙
洗ひ子荒角忽(クワバ)八は耳立る　東こ
筆浮と捨落て此京道　落家

精かや菖合やあかす春寿心やと　風仙
たまご呑てき蟹甑とくる　東こ
恵なれは関子池の色くる酒　落家
渡天を志さしもしれぬ春庵　風仙
うくひすの婦しく呑する肘まくら　東こ
永くよろへし草の糸道　落家

髭小町菖蒲

物やさの化粧手あつは息吉草　皇都 其讃

菖蒲の主なやめるやよききぬ　同 知石

菖蒲やその文字のなお妙殊の奥　同 帝貢

菖蒲も雨手志み小死笠簑　同 隆志

都つ人語小みな茎　恵ひ寸草　同 練石

胡つも能ほとつ手なる恵ひす艸　同 丈石

菖蒲やなまい数子ゑ　形見蘂　同 羅人

菖蒲や双剣あつひの習浴衣　同 軽羅

しや〳〵の口解く蝶も百来　同　仙鶴

仝

苔茶やそとりふ子の主する　洛　宰陀

百とせやまさ苔茶も花一ツ　同　百車

苔茶や主来るも九十九夜　同　九山

苔茶やちらかきまひも金清哉　同　可章

苔茶や摘る一本宝去春　同　一行

東の数をちる苔茶の光の郎　讃丸亀　節山

苔茶やかなやすまの幾百世　泉九佐世　戸外

苔茶ハそれも学ぶ詠る　摂州今津　愚哉

宰相をおりてすゝむ小歌の花　若州小浜　如江

苔茶や何紙継をそひきまつき　洛　冨鈴

苔茶やかさねハまけし二来三来　同　龍谷

仝

苔茶やなやめるところ旅人参　香稲菴　竿秋

追加

鞠の皐のさらや西笑の風　半時菴

進度味ゝ自妙

進嘉